

毎 日 歌 壇

加藤 治郎 選

水原 紫苑 選

伊藤 一彦 選

米川千嘉子 選

点満とおなじリズムで過ごす午後金木犀を愛
でるあなたと 川崎市 新井 将

△評▽点満と鼓動が響き合う。ゆっくりし
た単調なリズムである。病であるが心は穏
やかな感じ。キンモクセイの季節感がよい。

君といるときあたいたかい気持ちを炎ではな
く光と思ふ 名古屋 森本 有

△評▽恋する激しい気持ちは炎だろう。光
はまばゆい。君に照らされているのだ。

話したいことだけ話せばいいはずの 道路と
線路が隣にあって 奈良市 古井さらさ

コチコチのハーゲンダッツを匙で掘るたった
一人の転職記念日 広島市 堀 真希

甘すぎた缶コーヒートふたりきり三日月の下
橋を渡った 宮古島市 塩見 伴

許す っ て 自分 にな った 誰 に向 けて も 結局 自分
の 内 に たん ぽ ぽ 東京 展 零

新聞のにおいをかいで新聞のにおいを思い出
した日曜 津市 川原田明子

ひらがなを書く子のように凛としてひかる未
来にふるえる雲 平塚市 芝澤 樹

異次元へ飛ばされかけた 教室に「YMO」
と彫られた机 岐阜市 山上 秋恵

タッパーを満たし溢れてなお増えるわかめの
見ゆる世界は無限 東京 石井 しい

越冬のための毛布を置いてほしい、白樺をそ
りたつ言語野に 加古川市 石村 まい

△評▽越冬のための毛布をあげたいが、「白
樺をそりたつ言語野」は凍ることが夢では
ないのか。

青白い空を映して青白い運河 ばかだよ、言
われなくても 横浜市 永永 キヌ

△評▽「ばかだよ」は運河のひとりごとか。
時に自然の川よりも美しいあなた。

ガスパチョのトマトと祭りで投げられるトマト
どちらが理想の最期か 千葉市 星野 珠青

やがて来る光に備え君たちは青色の椅子を買
い溜めている 豊橋市 氏原 維持

地下深く忘れさられた彫像の頬をしているい
まのあなたは 名古屋 屋 河

さやかさよ 甲ひのやうにうつくしき鳩サバ
レーを並べて眠る 見附市 有村 桔梗

魂を行き来させつつ日本人形と少女の語らふ
夜更け 甲府市 村田 一広

滅亡の唇をめくるその指で海のつむじを撫で
てくれたね 東京 珠海 ユラ

引いてごらん美の延長線そこに死がある金の
葉を脱ぎ捨てると 宮津市 野 ばら

知らぬ間に人は傷つく十字架を刻まれ緋くし
豆腐ふるえる 高島市 くらたか湖春

「わやなあ、えらいこっちゃ」その後で「ぼち
ぼちやろか」と老老介護和歌山 中西 幸代

△評▽関西弁の「わやなあ」をつぶやく
と、どんな時でも困難をのりこえられる気
がするという。身についた言葉の力だ。

白いシャツばかり着てゐたマスターを街から
消した豆の値上がり 市川市 岡本 恵

△評▽深刻な物価値上がりへの憤り。皆に
愛されているコーヒードが姿を消している。

仕事終えファイル整理の途中にてライト消さ
れる介護士の夜 須崎市 野中 泰佑

馬鈴薯は氷のように硬かった離婚前夜のカレ
ーの中の 金沢市 竹内 一二

まあ元氣まあ幸せな老人です まあをつけれ
ば丸くおさまる 岡山市 久山 順子

啄木や安吾の激しさに憧れし少年も今は杖を
たよりとす 日野市 浅井 一蓮

「庭にチョウ」指差す妻に「キタテハだ」
間髪入れず昆虫老年 神奈川 佐々木 眞

辞めたいと思う今日でも明日には生徒の一言
私をつなぐ 水戸市 井田 里紗

病院の背中合わせの椅子の人ふらりと去りて
ついに戻らず 仙台市 古谷 隆男

ペン持たぬ人の多さに驚きぬツアーの中のア
ンケート記入に 春日市 伊藤 亮

ロボットが配膳してくる中華そばは飛ぶはぬ声
が安心誘ふ 幸手市 中村 早苗

△評▽コロナ禍での長いマスク生活の後、
こうした場面での安心と不安に人は敏感に
なった。ロボットに慣れてもきた。

目算ましをかけてゴミ出すゴミの目を隣人の
お裾裾出す人もあり 生駒市 奥田 充子

△評▽老人世帯で重いオムツを出すのが難
儀になったか。さまざまな事情と人情。

文具展カワイイあふれあれもこれもこども
あふれ 寂しきか 京都市 日下部ほの

眼を刺した火の玉のごと銀幕を焦がしたりけ
り仲代達矢 宝塚市 無茶工事冷熱

ぶちぶちと車が潰すどんぐりできのうは幼に
独楽を作った 野田市 片倉 伸明

青壁に九人の吾をり九つの未来へ送る証明写
真 小平市 真鍋 真悟

田舎町チョコザップだけ煌々と走り続けるハ
ムスターのごと 会津若松市 ともりゆめ

亡き吾子にいつの日にか吹き聞かせたしラン
ペットのダニーボーイを 吹田市 鈴木 基亮

茶畑で作業する人化粧せぬ化粧の香りが茶葉
に移ると 日南市 宮田 隆雄

とめどなき私の涙はナポリタン食べれば止む
と夫は信じる 仙台市 小野寺寿子

投稿規定

はがき1枚に選者を指定し、未発表の自作を2首・2句まで。住所、氏名、年齢、職業、電話番号を明記し、宛先は〒100-8051（住所不要）毎日新聞学芸部、短歌は「毎日歌壇」、俳句は「毎日俳壇」、○○先生（希望選者名）係へ。毎日新聞デジタルの投稿フォーム

(<https://mainichi.jp/kadan-haidan/>)でも受け付けています。他媒体との二重投稿や同一作品を複数の選者に投稿するのは厳禁。投稿は趣旨を変えずに添削することがあります。入選作は毎日新聞社の電子メディアやデータベース、アプリ「俳句でふてふ」で公開します。



こちらから投稿できます

おこわ

次回は16日に掲載します。